

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381197

研究課題名(和文) 英語プロソディの統合的指導法の開発

研究課題名(英文) Developing integrative approach to teaching English prosody

研究代表者

大和 知史 (Yamato, Kazuhito)

神戸大学・大学教育推進機構・教授

研究者番号：80370005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語プロソディ指導に関して、中等教育を念頭に置き、効果的な指導ガイドラインやタスク・活動を整備・提供することを目的とした。英語音声学の知見、タスクや活動について文献精査を行い、指導項目を精選・指導方法の開発・整備を行った。特に、複雑なプロソディを3つの原則として指導項目化することで、指導項目の重点化や指導順序の可視化が可能となり、統合的な枠組に昇華することができた。また、指導方法の開発では、従前の教科書を用いることを意識した。更に、開発した指導項目やタスクを、教育環境において試行し、学習者や教員からフィードバックを得た上で改善し、発表資料等の公開を行い、共有することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop effective teaching approach toward English pronunciation, particularly English prosody, at the junior high or high school levels. In order to achieve this aims, first of all, the researchers looked into theories of prosodic aspects and theories and practices about teaching English pronunciation. Based on the obtained information, the researchers carefully chose what aspects of prosody and in what order teachers should teach and developed the tasks and activities for teaching English prosody. With the help of teachers and learners at the attached secondary school, the researchers had an opportunity to implement these tasks and activities into classrooms and to obtain data and feedback from teachers and students. The results of a questionnaire on their awareness toward prosodic features showed significant gains in learners' awareness toward prosodic features both in and out of classroom situations.

研究分野：英語教育

キーワード：プロソディ 統合的

### 1. 研究開始当初の背景

現在の英語教育において、「コミュニケーション重視」や「国際語としての英語」といった背景のもと、英語音声への関心は比較的高いと言える。中等教育において、コミュニケーション活動が多く取り入れられ、英語を使う場面は確実に増加している。しかしながら、そうした活動の中で用いられる英語の発音には十分な注意が払われていないことが多い。中学校・高等学校教員対象の調査においても、音声学や発音指導に関する十分な訓練を受けておらず授業で発音を取り扱っていないことが明らかとなっている(有本, 2010; 河内山, 2011)。

中でも、個々の発音ではなく、アクセント、リズムやイントネーションといったプロソディの側面については、そのコミュニケーションにおける重要性は認識されている一方、その指導の困難さ故に、現在まで看過されてきた音声要素である(Celce-Murcia et al., 2010; Chapman, 2007; Dalton & Seidlhofer, 1994)。

教科書などでも、プロソディは取上げられているが、その際には、アクセント・リズム・イントネーションといったように、個別の項目として取上げられており、それぞれが関連されたものとして取上げられていない。音声学においては、アクセントとイントネーションとの不可分性の指摘(牧野, 2005; 松坂, 1986; Lane, 2010)や核配置に関する基本原理の提案(南條, 2011)など、プロソディの要素を一連のものとして捉えた記述もなされているが、英語教育においてはそれらが活かされているとは言い難い。

こうした状況のもと、英語プロソディの指導が必要であることを主張するだけでなく、その指導を実際にどのようにすべきかを説いていく必要があると研究代表者・研究分担者は考え、研究を始めるに至った。

### 2. 研究の目的

英語発音指導の基本的なプロセスは、(1)学習者の問題点がどのようなものであるのかを知り、(2)その原因を音声体系の比較などから探求した上で、(3)問題点の解消のために指導・評価を行う、の3点から構成される(cf. 富田・小栗・河内(編), 2011)。

(1)や(2)について、換言すると、英語プロソディ指導の「何を」については、英語音声学や第二言語習得研究の知見により比較的明らかになっているが、個々の項目が統合された視点に立っていない点が指導を困難にさせている。また、(3)の「どのような方法で、どうやって指導するのか」の部分については、十分に明らかになっていない。

中学校・高等学校に関して、学習指導要領の記述を見ても、「音読を行う、ペア・ワークやグループ・ワークを活用すること、ICTの活用、ALTを活用してコミュニケーション活動を行うこと」などをプロソディ指導に

関連するものとして挙げることは可能であるが、こうした記述ではプロソディが多分に関係することは分かるが、プロソディ自体の指導を行う上では具体性に乏しい。

そこで、本研究は、英語発音指導、中でもプロソディ指導に関して、「どのように」の部分である「指導の内容」や「方法」を整備することを通して、指導ガイドラインやタスク・活動を提案することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、効果的な英語プロソディの指導における活動・タスクを開発し、実際に中等教育機関において実践を試行した上で、指導ガイドラインや活動・タスクを整備するものである。

この目的を果たすために、まず、文献精査を中心に1)プロソディという概念の整理を行い、2)プロソディ指導に関するタスクや活動の整理を行った。それによって、指導枠組みの策定、指導項目の精選・指導方法(タスク・活動)の開発を行った。

開発された指導枠組みを用いて、実際の教育環境において実践を行い、学習者の英語プロソディの向上を確認するとともに、学習者・教員の双方からフィードバックを得ることで、指導の枠組みや指導項目や指導方法への更なる改善を促すことができた。最終的には英語プロソディの指導書・タスク集を広く公開することを目指した。

### 4. 研究成果

第一段階として、プロソディに含まれる音声要素であるアクセント・リズム・イントネーションを、個別に扱うのではなく、統合したものとして指導ができるような枠組みを「英語プロソディの指導における3つの原則」として提案した。原則は、以下の通りである。

1. 母音のあるところに拍がくる。
2. 拍が2つ以上になれば、強弱をつける。
  - a. 語強勢の形を確認
  - b. 弱は曖昧に早く
  - c. 強がおよそ等間隔でリズムを形成
3. 強い拍が複数になれば、その内の1つを目立たせる。
  - a. 一番目立つ語が、音調核
  - b. 原則は、イントネーション句の最後の内容語
  - c. そこでピッチを大きく変化させる
  - d. 別のところに来るということは意図がある

原則1は音節構造を、原則2はアクセントを、原則3は核配置やイントネーションを主に扱うものであるが、それぞれが個別項目となるのではなく、それぞれが関連しあっている枠組みとなっている。

また、それぞれの原則に関連する指導方法の提案を学会発表や講演・ワークショップなどでデモンストレーションとともに継続的

に行った(原理的な記述については図書の  
に, また, 活動例やタスクなどは口頭発表の  
①~④, ⑥, ⑧~⑩を参照されたい)。

第二段階として, この原則を具現化するタ  
スクや活動例を, 研究代表者の勤務校に附属  
する中等教育学校教員に依頼し, 教育実践を  
行った。中等教育学校1年生を対象とする生  
徒に対し, 平生使用する検定教科書に基づき  
ながら, 具体的なタスクや活動の内容記述・  
配列・3つの原則についてのレクチャーなど  
を行った。

実践の経過を観察しながら, およそ半年の  
間に原則の1を中心とした指導を行うことが  
できた。その際, 学習者に対しては, 事前・  
事後においてプロソディへの意識を尋ねる  
アンケートを実施すると同時に, 一定量のパ  
ッセージを音読する課題を録音した。それら  
の音声データを英語母語話者を聞き手とし  
て理解性(comprehensibility)を判断して  
もらい, 指導効果を検証したところ, 全体的  
に指導効果は見られたが, 意識調査との関連  
からも, プロソディへの意識が比較的高い学  
習者への指導効果を確認することができた  
(詳細は雑誌論文の , 学会発表の を参照  
されたい)。

このような教育実践を行う中で, 教授者か  
らのフィードバックを得ることで, プロソ  
ディ指導においても日本語を活用することに  
改めて気づかされたり(学会発表 や雑誌論  
文 ), 音読課題や朗読課題におけるプロソ  
ディ使用への意識づけにも利用できること  
を確認した(その他の や )。

中等教育学校や高等学校の教員向けにワ  
ークショップ等を行う中で, 一般の教育実践  
においても採用することができる指導方法  
や活動例を公開し, 共有することができた。  
また, プロソディ指導のニーズは日本にとど  
まるものではないことを, 複数回の海外での  
研究発表においても確認することができ, 英  
語プロソディ指導の必要性が高まっている  
こと, また現時点においては指導法が確立し  
ていないことが明らかになった(学会発表  
と )。このことから, 今回提案した「英  
語プロソディにおける3つの原則」という枠  
組みを, 日本とは異なる文脈でも応用可能  
性があるという知見を得たことは, 今後の教  
育研究への発展につながる大きな成果であ  
ったと考える。

今後の展開としては, この枠組みを用いた  
活動やタスクの開発を継続的に進めること  
により, 教員養成に資する形にすることが目  
標となる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文](計5件)

Yamauchi, Y., Yamato, K., & Kida, S.  
(2016). Errors in English spoken word

recognition: Effects of word frequency,  
familiarity, and phoneme Structure.  
Annual Review of English Language  
Education in Japan, 査読有, 27, 125-136.  
DOI: [https://doi.org/10.20581/arele.27.0\\_125](https://doi.org/10.20581/arele.27.0_125)

大和知史・アダチ徹子 (2016)「中学校検  
定教科書の語用論的観点からの分析—平成  
28年度改訂版「Sunshine English Course」  
を例に—」. 『神戸大学国際コミュニケーション  
センター論集』. 第12号, 79-89.  
DOI: 10.24546/81009382

軽尾弥々・大和知史 (2017)「プロソディ  
指導の実践: ハミングで音節感覚をつかむ」.  
『神戸大学国際コミュニケーションセンタ  
ー論集』. 第13号, 65-75.  
DOI: 10.24546/81009748

Hashimoto, K., Takeyama, T., & Yamato,  
K. (2017). Perception of accented speeches  
by Japanese EFL learners and its  
relationship with processing difficulty. 『教  
科教育学論集』, 16, 45-50.  
[https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD0003  
0166](https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00030166)

軽尾弥々・磯田貴道・大和知史 (2018)  
「日本語を活用した英語プロソディ指導」.  
『神戸大学国際コミュニケーションセンタ  
ー論集』. 第14号, 14-23.  
DOI: 10.24546/81009748

[学会発表](計12件)

大和知史, 「プロソディの捉え方とその  
指導」. 第24回広島大学外国語教育研究セン  
ター 外国語教育研究集会 シンポジウム「英  
語の音声指導 - その理論と教室内での実践  
方法 -」. 2015.03.06. 広島大学・総合科学部.

大和知史・磯田貴道, 「核配置を重視し  
たプロソディ指導-教科書本文を活用した指  
導法の提案-」. 第41回全国英語教育学会熊  
本研究大会. 自由研究発表. 2015.08.22. 熊  
本学園大学.

山内優佳・大和知史, 「英語の音声単語認  
知における誤りの分析」. 第41回全国英語教  
育学会熊本研究大会. 自由研究発表.  
2015.08.23. 熊本学園大学.

大和知史・磯田貴道, 「もっと授業にプロ  
ソディ指導を!」. 北海学園英語教育研究会第  
4回研究会 特別セミナー. 2015.10.03. 北海  
学園大学.

Takeyama, T., Hashimoto, K., & Yamato,  
K. “What “time” tells us about L2  
comprehension of accented speeches: A  
reaction time study”

ALAA/ALANZ/ALTANZ 2015 Conference. Poster session. 2015.11.30-12.02. The University of South Australia – City West Campus.

磯田貴道・大和知史. 「プロソディ指導に組み込みたい音節・強勢の指導-教科書本文を利用して-」. 第 42 回全国英語教育学会熊本研究大会. 自由研究発表. 2016.08.21. 獨協大学.

Hashimoto, K., Takeyama, T., & Yamato, K. “Perception of accented speeches and its relationship with processing difficulty: Do Japanese learners have intelligibility benefits over Japanese English?” ALAA 2016 Conference. Poster session. 2016.12.07. Monash University, Melbourne.

大和知史. 「プロソディ指導と My English の構築」. 神戸大学附属中等教育学校英語科 Annual Review 講演. 2017.03.29. 神戸大学附属中等教育学校.

大和知史. 「授業に取り入れたいプロソディ指導」. 第 57 回 (2017 年度) 外国語教育メディア学会 (LET) 全国研究大会ワークショップ. 2017.08.05. 名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎.

磯田貴道・大和知史. 「日本語を活用した英語プロソディ指導」. 全国英語教育学会第 43 回島根研究大会. 自由研究発表. 2017.08.20. 島根大学.

Yamato, K., & Isoda, T. “Introducing prosody instruction into Japanese secondary school classroom: A classroom-based research” The Applied Linguistics Conference (ALANZ / ALAA / ALTAANZ). Oral presentation. 2017.11.27. Auckland University of Technology, Auckland.

Yamato, K., & Isoda, T. “Teaching English prosody to Japanese learners: “Three principles” approach to prosody instruction” 53rd RELC International Conference. Paper presentation. 2018.03.13. SEAMEO Regional Language Centre, Singapore.

〔図書〕(計 1 件)

大和知史. (2016). 『英語のプロソディ指導における 3 つの原則』の提案とその理論的基盤. 柳瀬陽介・西原貴之(編・著). 『言葉で広がる知性と感性の世界-英語・英語教育の新地平を探る-』. 広島: 溪水社 (pp.219-231)

〔その他〕(計 3 件)

大和知史. 「英語教育研究法セミナー1」. 第 47 回中部地区英語教育学会・長野大会 コメントーター. 2017.06.24. 信州大学.

大和知史. 「英語コミュニケーション能力を育成する効果的な指導および評価について」. 「外部専門と連携した英語担当教員の指導力向上事業」講演. 2017.10.23. ピュアリティまきび.

大和知史. 「英語プレゼンテーションのはじめの第一歩～音読・朗読・プレゼンへのステップ～」. 「Take a New Step! 学術英語スキルアップセミナー」講演. 2018.02.15. 神戸大学瀧川記念学術交流会館.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大和 知史 (YAMATO Kazuhito)  
神戸大学・大学教育推進機構・教授  
研究者番号: 80370005

(2) 研究分担者

磯田 貴道 (ISODA Takamichi)  
立命館大学・文学部・准教授  
研究者番号: 70397909